

ご退職の先生を送る

三ッ木道夫先生のご退職によせて

ベティーナ・ギルデンハルト

三ッ木道夫先生のことを一言で表現しようと思えば、ドイツ語の「フィロローゲ (Philologe)」という言葉がぴったり当てはまる。この言葉の由来は、ギリシャ語の「φιλόλογος (フィロロギス)」であり、直訳すれば、「学問の友」という意味である。ドイツでは、19世紀から造詣が深く、ラテン語とギリシャ語の古典に詳しく、文学全般を研究する学者をさすものとして定着してきた。ラテン語と古典ギリシャ語をも習得され、ドイツ文学および言語思想史を専門とされている三ッ木先生はまさにその精神を体現している方である。先生は長年にわたって「翻訳」を中心に研究を重ねてこられた。多くの業績の中、例えば2008年に出版された『思想としての翻訳—ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』(白水社)では、ドイツ語圏の19世紀から20世紀にいたるまでの文学や思想に関する論考を訳出されている。この力作は、まさしく「フィロローゲ」にしかできないものである。本書は、詩人、思想家、学者などの様々な文章をドイツ語の原文から邦訳したものであるが、原文に対して忠実でありながら、それぞれの独特な文体から訳出された自然な日本語は、三ッ木先生の文献に対する深い愛を如実に物語っている。近年、人文学に対する関心が薄くなっていると言われていたが、21世紀の日本で生活しながら、19世紀のドイツ文学・歴史・思想を「精神的なふるさと (geistige Heimat)」として持っている先生の姿を通じて、時間と空間を超越するという人文学の力と魅力を再確認することができる。私にとって印象的なのは、19世紀の文学などについて語る際の、先生の微笑みである。その笑みは研究を通じて (先生はいつも謙遜して「お勉強」と仰っているが)、「精神的なふるさと」を見つけた者の喜びにほかならない。

先生の文献に対する愛は、「教育」の面においても表れている。ドイツ語教育では、ドイツ語を単なるコミュニケーション手段として教えるのではな

く、ドイツ語そのものの面白さも学生に伝えることに勤しんでこられた。ドイツ語の独特な表現や言い回しを取り上げることは、学生の知的な好奇心や興味を引きつける。先生と私の間でも、ドイツ語と日本語の面白い表現についての話にはしばしば花が咲いたものである。先生はドイツ語教育における新しい動向に対しても常にオープンで、新しい教授法を柔軟に授業に取り入れてこられた。ドイツ語パートが2007年から同志社大学で採用している「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」に基づくドイツ語検定試験 Start Deutsch (A1) と Zertifikat A2 の実施・運営にも多大なご尽力をされてこられた。また、ご定年間近にもかかわらず、ドイツ語パートのHPのリニューアルにも手を掛けてこられたように、同志社大学におけるドイツ語教育を多方面から支えてこられた。グローバル・コミュニケーション学部では、先生は Communicative Skills in German の授業の他に、2017年と2018年に学部の看板科目である Seminar Project を担当されたが、2017年の担当プロジェクト「日本文化理解の一助となる映画祭・写真展の開催を目指す」はみごと最優秀賞に輝いた。

多くの学生にとって、三ッ木先生は「お父さん」のような存在である。卒業後も、教え子たちの人生相談に乗ったり、結婚式に呼ばれたりというように、先生の活動の場は教室という狭い空間をはるかに越えている。また、次世代の若いドイツ語講師陣の育成にも心血を注いでこられ、講師控室ではよく囑託講師の方々とお話される姿が見かけられる。学務においても、先生は労を惜しまず、全学共通教養教育センター所長など、様々な役職を担ってこられた。研究・教育・学務をバランスよくこなしてこられた三ッ木先生はまさに模範的な同僚である。

三ッ木先生は、2019年3月にご定年を迎えられる。15年間、お世話になった私にとっては、先生がいらっしゃらない職場は未だに想像がつかず、寂しくて仕方がないものだ。大黒柱がいなくなるという不安を抱えながらも、先生が築き上げてこられた土台の上で、教えていただいたことを生かし、頑張っていく所存である。三ッ木先生、長い間本当にどうもありがとうございました。